当時 35 歳
1988 年 10 月
高校二年生に
あてた通信

発行者　公認心理師/社会福祉士　堀 川 重 敏

第 15 巻　第 34 号

ぜんそくぜんしんのこと

記事内容はわたし個人の見解であり、すべての方への有効性は保証できません。

ご意見などの宛先　horikawassw@gmail.com

「小生の長男は 6 才。2 才の誕生日から四年、小児喘息を患っている。『鉄筋住居はダ×だ』と専門医から言い渡されて引っ越し、七年間の(長崎)五島勤務最後の半年は発作が起きず、家族みんなで喜んでいた。

しかし…教職員アパートに転勤転居して半年、彼はほとんど飲まず食わず眠らず発作の四日間を、ただ耐える。昨日ようやく歩いたが、まだご飯は食べない。」

☆1

「発作は彼の体内に生じた嵐である。胸の中の轟轟(ごうごう)という音が聞こえる。脂汗(あぶらあせ)で髪までがぬれる。嵐は彼に、横になることを許さない。19　しかない体重をエネルギー源に、この嵐はひたすら荒れ狂う。

ただ見守るしかないわたしたち。昨日見た笑顔に、ふっと息がつまりました。」

★2

「今のきみにそんな病はなく、元気でいるかも知れない。今、親に反抗しているきみのご両親は、小生たちと同じ苦しみを味わって来たとしても、それまでの苦労を口に出すことはないだろう。

たとえ反抗していても、時々おかあさんたちに、ありがとう、と言ってください。

自分らしいと思う生き方を続けてください」

☆3

過去の通信を読み返していて目にした 36 年前のこの通信。宛先は担任する 26 人の水産高校二年クラスの生徒とその保護者さんたち、そして全教職員でしたが、今ちょうど《ひなたぼっこ》で預かる子どもたちの親御さんたちと同年配頃の、親としての感慨が書かれてありました。

36 年前のわたしはもはや存在しません。

でも、その時から 42 年間、親として育ってきたわたしの人生があります。

人の人生は、一つとして同じものはありません。でも、目の前のことだけにとらわれて生きて悩み苦しみ続けるより、色んな人の生きざまを見聞きして、その中からあなたにふさわしい生き方を見つけるのも良いのではないでしょうか。

子どもが死ぬかも知れない心配も、子どもが理解できない苦しさも、どんなに頑張っているか誰にも分かってもらえないもどかしさも、一人の人間としてできることを、それができる時間と場所で取り組んでいたら必ず、頑張って来て良かった、生きていて良かったと言える日が、来ます。